

『水土里の郷・仙北平野わくわく探訪』開催される!!

～施設の見学を通して、農業用水の役割について学ぶ!!～



7月7日(土) 農業・農村の多面的機能や、農業水利施設の役割・重要性を子供たちに学んでもらおうと「水土里の郷・仙北平野わくわく探訪」が、大仙、仙北、美郷の3市町を会場に開催され、秋田市と大仙市の小学校児童と保護者合わせて31名が参加した。

「わくわく探訪(土地改良施設巡り)」は、子供たちに農業水利施設などを見学してもらい、農業・農村について理解と関心を持ってもらおうと「あきた食料・環境・ふるさとを考える地球人会議(山上信子会長)」が主催するイベントで、今年で通算

16回目の開催を迎えた。

最初に訪れた大仙市の仙北平野用水管理センター(水土里ネット仙北平野)では、多くの水利施設を集中的に操作して、仙北平野の農地に必要な水を供給するため、24時間体制で監視、制御している施設を見学した。その後、参加者は、次の見学地である仙北平野の水田約1万ヘクタールを潤すため、玉川の流れを堰止めて用水路に引き入れる施設「玉川頭首工」(仙北市)をめざした。



玉川頭首工では、普段は入ることが出来ない頭首工上部の管理用通路を「よしっ!いくぞ!」と歓声をあげながら対岸まで渡りながら見学した。続いて、1号幹線用水路・2号調整工、レーキ式除塵機などを見学し、児童は「すごい水の勢いで驚いた」、「田んぼを潤すしくみが少しわかった気がする」と話していた。

また、大曲農業高校太田分校では、郷土芸能部20名の皆さんによる郷土芸能発表を鑑賞し、「寄せばやし」「秋田おぼこ」など

の唄と踊りに、盛んな拍手を送っていたほか、実習で育てたお花(マリーゴールド)をプレゼントされ、参加者は大変喜んでいました。

午後からは、美郷町の「関田円形分水工」を訪れ、水土里ネット七滝の役職員から、丸子川から引いた水を水槽(容量1.8トン)に噴出させ、180個の穴により、七つの水路に必要な量に応じた水を分配して、各地域の水田を潤していることや、水路に取り付けた小水力発電機を動かして案内板などを照らしていることを聞いていた。



次に、秋田県農業の過去・現在・未来について科学の目を通して楽しく学習することができる施設「秋田県立農業科学館」を見学。館内では、秋田県の過去の農業と農村の姿、農業についての新しい情報、身近なテーマをもとにした農業と科学について楽しく、考え、学ぶことができた。



今回、小学生の皆さんに仙北管内の数多くある施設のほんの一部しか紹介できないのが残念であったが、私たちの暮らしの成り立ちに欠くことのできない水や土。その恵みの活用と保存、そして地域住民の生活空間である…里。この『水』・『土』・『里』の大切さを理解のうえ、参加した皆さん一人ひとりが、これを

守る「地球環境防衛軍」の隊員になってくれたらとの思いであった。

私達が住んでいる「あきた」には、豊かな自然環境を背景に、先人たちがつくりあげてきた、かけがえのない遺産としての農業水利施設や地域文化があります。今後も、この「わくわく探訪」を通じて、様々な施設の歴史や役割、そして、「水のはたらき」を伝えていき、子供たちの「水」「土」「里」に対する理解と関心を広めて行きたいと考えている。



水土里ネットの合併予備契約調印式



■平成25年1月の設立へ —五城目町の3水土里ネット—

6月19日(火)五城目町役場本庁に於いて、「馬場目川水系土地改良区」の設立に向けた、五城目町の3土地改良区(南秋田郡真崎堰、南秋田郡大川、南秋田郡五城目)による合併予備契約調印式が行われた。

本地区は、平成19年7月に、各種事業の円滑な推進と、地域における土地と水の調整機能を十分に発揮できる組織体の実現を目指し、「馬場目川水系地区土地改良区統合整備研究会」を発足しているが、賦課金の格差問題等、様々な課題があった。

しかし、統合整備による合理的で且つ財政的に安定した土地改良区運営が必要であるとの強い認識のもとに、それぞれの課題を克服し、「馬場目川水系地区土地改良区合併推進協議会」において統合整備計画等の協議が重ねられた。

この日の調印式には、土地改良区役員や町・県の関係者を含めて約50人が出席し、合併推進協議会長を務める渡邊五城目町長が「これまで3土地改良区は、地域の緑豊かな自然、清らかな水資源等の地域環境を保全し活用する、重要な役割を担ってきた。今後は、様々な土地改良事業が生じてくることが推測され、その役割は一層重要なものになるので、合併による運営の合理化、再生健全化等により地域農業の振興に寄与されることを期待する」などと挨拶。続いて、各土地改良区の理事長と立会人の渡邊町長が予備契約書に署名・押印した。

合併後の土地改良区は、受益面積903ha、組合員853人となる予定で、平成25年1月31日の発足を目指している。



渡邊協議会長(五城目町長)あいさつ



特集

農業水利施設内の「ゴミ」問題

シリーズ⑩

本会役職員が、水土里ネット農業水利施設内のゴミ実態を踏査

6月27日(水)、秋田市内の新城川土地改良区受益地において、本会役職員が同土地改良区が管理する農業水利施設内で、ゴミの実態を踏査するとともに、ゴミ処理作業を手伝った。

現地で、新城川土地改良区の安田理事長が「秋田市の最高気温は29度という暑さにもかかわらず、大勢の皆様方にお越しいただき、心より感謝を申し上げます。6月上旬には新城川地域の住



民が参加しての『住民のクリーンアップ活動』を実施しているが、今回のような水土里ネット秋田が中心となった農業水利施設内の『ゴミゼロ』運動への取り組みは初めである。熱中症などにも充分留意して、ケガ・事故等ないように、お互いに気をつけて最後までがんばりましょう」と挨拶。

引き続き、安養寺事務局長から作業内容について説明があり、本会の役職員11名が2班編成で、それぞれのルートで、踏査・作業を開始した。開始まもなく土地改良区が借り上げた2tトラック2台が、枯れ枝、刈草、缶、瓶、ペットボトル等であらびとなり、土地改良区が抱える「ゴミ」問題について、その取り組みの必要性をしみじみ痛感した。

作業終了後、本会の水戸常務理事より「暑い中ご苦労さまでした。平成22年4月より、『県民の手で、食の安全・安心』をスローガンに、農業水利施設内の『ゴミゼロ』運動に取り組んでから、今年で3年目になる。新城川地域を始め県内の各地域の実態を知るには、今日のようなゴミ処理作業を体感して土地改良区の苦労を知ることも重要である。これからは、いかにして秋田県産の美味しい『米』を売るかだと思



う。今、県では食味ランキング特Aに向かっての施策を展開しているが、私たち水土里ネットのできることは、食の安全・安心のために『きれいな水』を提供することであり、農家の皆さんがその水で作ったお米を、安心して消費者である皆さんに食べていただくことが、秋田県産米への付加価値をつけることである。今日のゴミの状況を見ると、先ず農業者の『意識改革』と『足下の実践』こそが一番重要なことであると思う。今後もこのような農業水利施設内のゴミ処理に係わる『ゴミゼロ運動』の取り組みを積極的に推進し、秋田県産米の特徴として『きれいな水で作った米』をアピールできればと考えている」とお礼の言葉をのべ、全日程を終了した。





地域のゴミ問題について ～美しい田園風景を目指して～

新城川土地改良区事務局長 安養寺 文 隆

本地区は秋田市北部地区（上新城、下新城、飯島、金足、外旭川）と潟上市（旧天王町、旧昭和町）の一部にまたがる、秋田市近郊2,400haの農村地帯であります。地区の主要水源は、秋田地区は新城川、草生津川、馬踏川の3河川からであり、潟上地区は八郎潟から取水供給しております。取水供給するうえでもっとも重要なのがゴミの処理であります。

近年、地域の都市化に伴いゴミの不法投棄が増えるようになり、年々ゴミの処理に関する経費も増加してきている現状であります。刈り取られた草や農業用資材の外、ペットボトル、空き缶、買い物袋などが多く、中にはタイヤ、電化製品、タンスなどの粗大ゴミも投棄されることもあります。そのゴミが原因で農業水利施設が故障したり、取水量が低下したり様々な問題を引き起こしております。

土地改良区としても、職員や施設管理人による巡回の回数を増やしたり、看板の設置や広報等による啓発活動などを行っていますが、なかなか成果が出ておりません。費用をかけて処理するのは簡単であります、いかに費用をかけないで未然に防ぎ維持していくかが最大の課題であります。私共もこつこつ活動が続けていきますが、土地改良区だけでなく、土地連、行政、企業など様々な団体からも協力して頂き、啓発活動を強化しゴミの無い綺麗な田園風景を目指して行きたいと思っております。

6月13日（水）あきた食料・環境・ふるさとを考える地球人会議が開催され、議事の終了後、水土里ネット秋田の、農業水利施設内の「ゴミゼロ」対策に係わる意見交換が行われた。

運営委員の方々の声

- 農地・水・環境保全向上活動支援事業でNPO法人を立ち上げた。農業従事者が少ないので、設立目的である環境美化活動に振り回され「ゴミ」問題まで手が回らない状況であったが、組織的（農地・水）に農業水利施設等の「ゴミ」問題に取り組んだら、意識の改革が行われ啓発効果が見えてきた。台風の襲来等により発生するゴミもあり、風雨の猛威には勝てないが、組織的に動かなければ目標達成は出来ないと考える。
- ゴミをなくするのは簡単である。ゴミを捨てなければよい。刑罰などを掲示した啓発用看板を設置しても効果がなく、子供達に対する環境学習の中で、子供に託し親に「ポイ捨てはダメ」と逆指導することが効果に繋がって行くのではないかと考える。また、何時まで、何処までという問題もあるが、イメージが浮かぶ目標設定が必要と思う。
- 都会になればなるほど薄れてくるが、自分達の地域は「自分達で守る」ことが重要である。また、「ゴミ」を捨てる人は「ゴミ」を捨てないと思われる。
- 自分の親の時代は「ゴミ」を川に捨てる時代であったが、現在は、捨てるゴミの科学物質の問題もあり親の時代とは変わった。このような時代の中では、子供達の声が必要であり、川の生態系の変化を捉え、「何故いなくなったか」、「誰のせいなのか」など、角度を変えた考え方も必要ではないか。また、「水土里の日」を決めて、土地改良区役員が自ら「ゴミ」処理を行うような体制作りをするのも一方法と考える。

各水土里ネットの皆様へお願い！

広報等に「ゴミ捨て防止」コーナーを設置して頂き、刈草・農業用資材ゴミを下流域へ流さない啓発活動をお願いいたします。

【水土里ネット秋田】